

私が育った住宅街

芹澤 暁子

私の父が、その「土地」を買ったのは、今から50年前、1970年代のことである。父はその「土地」に家を建て、私はそこで育った。都内から電車で四、五十分の郊外の住宅地だ。千戸余りの住宅が集まり、その中に小学校や商店街、病院があって、一つの街のようだった。当時盛んに造られていた公の開発地で、やっと抽選で当たったようだ。

建築士の父が設計した家が建ち、我が家が引っ越してきたころは、建っている家はまだまだばらだった。8軒が2列の16軒で一つの塊(ブロック)になっていた。うちのブロックにはうちの他に2軒ぐらいいしか建っておらず、塀もなく造成された土地には雑草が茂っていた。小さかった私はとてつもなく広く感じた。うちのブロックからは出てはいけないという約束のもと、広く平らな広場で兄と自由に遊んだ。どこからか同じくらいの子供が集まって来て、日に日に友達が増えて行った。おもちゃのピストルを片手に一日中走り回っていた私を近所の人が見かねて、引っ越してきたばかりの女の子の友達を紹介してくれた。それからはピストルを手にする事は無くなった。

次々と家が建ち、街が出来上がっていった。小学校はみなこの住宅街の子供達。第一公園から第七公園まで、公園が7つもあった。それぞれの公園の遊具に特徴があり、どの公園にも子供が溢れていた。木登りできる公園では、私より高く登った友達が「アメリカが見える!」と自慢してきて悔しい思いもした。「〇〇ちゃんは第〇公園の近くの家」といった具合に公園を目安に大体の友達の家が分かった。

住宅地の夏祭りでは、子供神輿や山車を引いて公園を周った。照り付ける真夏の日差しは辛かったが、公園ごとにアイスやジュース、お菓子がもらえた。大きなうちわであおいでくれて、わっしょいわっしょい大きな声で応援してくれる元気なおじさんが沢山いた。夕方からは、やぐらが組まれた小学校の校庭で盆踊り大会があった。今でもその時のわくわく感が蘇るほど楽しいイベントだった。

結婚して家を出るまでこの「土地」で私は育った。切磋琢磨し、悩みを相談し合い一緒に泣いた一生涯の親友も出来た。駅から少し離れていて、父は東京への通勤も大変だったと思うが、犬を飼い、植物をいっぱい育てた庭があり、公園があり、沢山の友達がいるこの地で育ててくれた両親に感謝しかない。

両親は健全だが、高齢だ。これから先、この土地、この家をどうするかは決めていないし、まだ分からない。しかし両親にとっても、兄や私にとっても特別な場所だ。切っても切り離せない思い出が詰まっている。これからもずっと、誰かの大切な土地として、地球の大切な一部分として、活用され続けて欲しい。